

# 「静夜思」の「牀」

早稲田大学教授  
森山卓郎

先日、湖南省の博物館に行った。長沙から出土した唐代の井戸の遺跡が展示されていた。煉瓦を重ねた三十七センチほどの高さの囲い（井桁・壁）の直径二、三メートルのかなり大きな丸い井戸だった（囲いの上は平らで厚さ四十センチ位）。その展示の解説に

「牀前月光」の「牀」とはこのような囲いのこと、と書いてあった。私は驚いた。

まず、ここで、李白のあの「静夜思」を思い出す必要がある。

牀前看月光

牀前月光を看る

疑是地上霜

疑ふらくは是れ地上の霜かと

举頭望山月

頭を挙げて山月を望み

低頭思故郷

頭を低れて故郷を思ふ

これは有名な詩だが、実は中国では、起句と転句の形が違い、「牀前月光」

「举頭望明月」と教えられている（森瀨壽三氏『唐詩新攷』によれば「明月」となっているのは明末の『唐詩選』以来だが、日本の本文ではこの部分が修正されている）。博物館の展示の説明も中国での本文の形だが、「静夜思」の解釈のことを述べている。

さて、「牀前」に戻ろう。一般には起句は「寝台の前（の床）を照らす光を見る」と解釈される。私もその霜という見立てがいいと思ってきた。が、博物館の説明は、「牀」を井戸の囲いだと言ふ。確かに辞典類を見ると「牀cunang」には「井桁」という意味があり、唐代の用例もある。置き換える」と「井戸の前を照らす月光を見る」という解釈になるが、月光は周囲も照らすから、「井戸の前で月光を見る」という解釈もできる。月光は井戸にもさしこんでいると想像できる（水面に月が映るといふ想像はやりすぎか）。井戸は村や町の重要施設。望郷につながる。

る。「牀」が井戸の囲いでも、「寝台」と同様、起句「看月光」と結句「低頭」の姿勢は同一と言える。承句も、「地面の上の霜かと疑われる（霜のようだ）」という点で「屋外として解釈されるが、問題はない。

ついでながら、転句の「山月」の解釈も微妙だ。一般には「山の端にかかった月」と解釈されているようだが、「山の上の月」と考える余地もある。

こんな話を学生たちとしていたら、ある中国人留学生から、小学校で「牀」を「食卓」と習ったと聞いた（この意味は未確認だが、寝台の代用か）。挿絵があつて、李白らしき人物が食卓に酒を置いて一杯やっていたそつだ。

文章の解釈は、まずは多様な可能性の中から合理的に考えていく必要がある。「井」の中の蛙にならないためにも、いろんな考え方を虚心に検討することは重要だ。さて、あなたの解釈は？